

6 わたしを離さないで

1 構成

第一部 第一章～第九章

ヘールシャム 十六才まで
クローンとしての生き方を学ぶ

第二部 第十章～第十七章

コテージ 十七才・十八才
介護人か提供者かの選択

第三部 第十八章～第二十三章

外の世界 十九才以上

全体は以上の三部に分けられ、第二十三章で成立している。章の中には行間が空いているものがあるのでそこを段落に切った。

第一部

第一章

1

時 場所 アパート

事件

わたし（キャシー）は、三十一才介護人を十一年以上やっている。あと八ヶ月その終わりまで続けてほしいと言われている。十二年働くことになる。介護した提供者の回復ぶりはみな期待以上だ。ヘールシャ出身で、いろいろなところでいろいろな提供者の面倒を見た。

時 場所 介護人として三年目

事件

三回目の提供を終えた人が、ヘールシャ出身というといいところだったそうだと行った。

2

時 場所 田舎

事件

あちこち移動しているとヘールシャムを思い出す。

時 場所 体育館 十二、三才

事件

五人が隠れた。ルースは私の強いメンバーだ。トミーはサッカーがうまい。癩癩もちでわめき続ける。ローラはトミーの物真似をする。

時 場所 体育館

事件

トミーは手を払いのけ頬に当たった。

第二章

時 場所 ヘールシャム 十八番教室 十三才

事件

ほとんど毎週のように健康診断があった。本館最上階にある十八番教室でトリシア看護婦に診てもらおう。上っていくと下りてきたトミーがぶつつもりはなかったと謝る。私は偶然のこととうなずく。

時 場所 十四番教室

事件

トミーは何回か癩癩玉を破裂させたが、十四番教室ではすごく、机をひっくり返し中身をぶちまけた。クリストファー先生が腕を後ろにねじり上げた。

時 場所 年長組二年 野外走

事件

二人一組で走っているのに、トミーだけ走者がいなかった。

時 場所 年長組 六人一部屋

事件

消灯後、トミーについて内緒話をした。ルースはトミーが態度を変えないとだめだ、春の交換会に何も出していないと言った。

時 場所 交換会 年四回 展示即売会

事件

三ヶ月作り溜めたものを出品する。自分の持ち物を増やすただ一つの機会だ。

時 場所 ドーバー回復センター

事件

ルースの世話をしていた時、彼女はお互いの作品を認め合うよう教えられたと語った。

時 場所 ルースの初めての提供

事件

数ヶ月後最悪の時期に達していた。ここは私も気に入っている施設の一つだ。ああいうところで最期を迎えられればいいと思っていた。クリスティはすごい詩人と思われていたが、私は十一才なんて他人の死に興味なんか持たないと言った。

時 場所 消灯後 寮

事件

ルースは、トミーは何もやろうとしない、意地悪されていたと言った。

時 場所 年少組時代 ジュラルディン先生の図工の時間

事件

トミーは一枚の水彩画を描いた。背の高い草の中に一頭の象が立っている。三つ下の子が描くような稚拙な絵だ。先生はしきりに褒めた。それがトミーの反感を誘った。癩癩持ちが知れ渡りまたからかいの種になった。

時 場所 年長組二年 十三才の夏

事件

トミーいじめのピークだった。

時 場所 小さな変化

事件

アレグザンダーとピーターがトミーと肩を並べて歩いている。

時 場所 ある日の午後 運動場

事件

マーサーがトミーの動作を真似しはじめた。全員の視線がボールを蹴ろうとするトミーに集まる。絵が上達したわけではなく癩癩が収まった、自分が変わった。

時 場所 食堂 昼食

事件

トミーは嬉しそうだ。いいことがあったか聞くと、お見通しだ、このところ楽しい、仲良くやっていると答える。怒らなくなった、少しは成長したと言う。

時 場所 二ヶ月くらい前

事件

ルーシー先生が、絵を描きかきたくなければ描かなくてもいい、工作したくなければしなくてもいいと言ってくれてすごく楽になった。

私はからかっている、嘘をついていると腹を立てる。彼は困った顔をし、しょんぼりする。何ヶ月も心配してやったのと思う。

彼は全部話す、池に来てくれと頼む。ルーシー先生の言ったことは嘘ではないのかも知れない。

第三章

時 場所 池 本館南 秋 羊歯 アヒル 浦の穂 水草 十月半ば

事件

私は食堂で一方向的に話を打ち切った。二人とも私服だった。ルーシー先生はずんぐりして猫背、スポーツマン、ホッケー選手、健康で体力抜群だった。

時 場所 先生の部屋 保護官住宅

事件

先生は事情を残らず話せ、怒ったことをすべて話せと言った。不器用な生徒、生み出すのが苦手な子を見てきた。苦しんできた子が突然才能を開花させるのを見てきたと言う。

トミーは繰り返し聞かされた、何かに惹かれた。先生はとてもいい生徒、誰にも負けない生徒、そう思っている人間は一人いると言った。

私がかからわれたと言うと、絶対違う話はよく聞いた。効果があったと言う。もう一つ、教わっているようで教わっていないと言った。

私はマダムはいい絵だけ持って行くがどうするのか、なぜ絵を展示するのか問う。いつか提供が始まることと関係がある。

時 場所 五、六才の頃

事件

粘土をこねていた。展示館行きをほめてくれた。

時 場所 十一才 晴れた冬の日

事件

キャロルが、先生の話展示館級ですよと言うと全員びっくりした。
マダムは前に二度三度四度と来て出来のいいものだけを選んで持って行った。

時 場所 八才

事件

ルースはマダムは私たちが怖がっていると言った。

時 場所 正面玄関内側

事件

私たちは一斉行進し、左右二手に分かれてマダムに近づき失礼しますと言った。彼女は凍りつき通り過ぎるのを待った。マダムの恐怖を全身で感じとった。

時 場所 八才

事件

自分が誰で保護官や外部の人間とどう違うか知り始めた。

時 場所 五才六才

事件

自分は外の人間とはとてつもなく違う。マダムは悩みもせず害もしない。この子らはどう生まれなぜ生まれたかを思って身震いする。少しでも体が触れ合うことを恐怖する。

第四章

1

時 場所 引退

事件

介護生活は今年一杯で終わる。終わりに向けて準備する。

時 場所 ある日の午後

事件

マダムへの関心が薄らいた。

時 場所 ある授業中。

事件

ルーシー先生は交換切符論争について話す。何度も交換会を経験し切符をお金として使うことに慣れ作品の値段を意識するようになった。

時 場所 交換切符

事件

マダムが持って行った作品の分を交換切符で埋める。ポリーがマダムはなぜ作品を持っ

ていくのか尋ねるとルーシー先生ははちゃんとした理由がある。いつかちゃんと説明してくれると答えた。

2

時 場所 販売会 混雑 喧騒

事件

月に一度、大きなバスが乗りつける。人だかりがする。外の物品に触れる場だ。

時 場所 ヘールシャムの日 朝食

事件

エミリ先生のお説教は分かりにくい。ひどい罰を与えることはない。ルースは教室のエミリ先生は明晰だと言った。

時 場所 年長組三年 晴れた夕方

事件

教室を歩いているとエミリ先生の姿が見えた。教室の別の場所にいる生徒に語り始めた。

3

時 場所 ルース

事件

彼女と最初から仲良しではない。

時 場所 五、六才の頃

事件

ハナやローラとよく遊んでいた。

時 場所 二年後 年少組 七、八才 南運動場

事件

ルースがやってきて、馬に乗りたくないかと言う。自分の馬はないというと、ブランブルに乗せてやると言う。

時 場所 金網の近く

事件

キャンター、ギャロップで行ったり来たりする。ルースはほかの馬にも乗せてくれた。乗馬センスはかなりのものだった。

ルースはジェラディ先生は好きか聞く。もちろんと答えると、先生の秘密親衛隊にしてくれると言う。

時 場所 数日間

事件

徐々に答えを知っていく。

第五章

1

時 場所 秘密親衛隊ごっこ 十才から八才

事件

九ヶ月から一年続いた。隊員は六人から七人。ジュラルディン先生こそヘールシャム一番の先生でプレゼントを作った。

時 場所 敵は年長組、年少組の男子

事件

アイリーン先生は黒幕と思われていた。

時 場所 ヘールシャム裏手の丘の頂にある森

事件

多くの子供が怖がっていた。恐怖の言い伝えがある。これから眠ろうとする所に怖い。

時 場所 活動の中心

事件

ジュラルディン先生の誘拐計画の証拠を集めることだ。陰謀に加担している人物を次々に発見していった。対決を常に避け続けた。直接行動は時期尚早とされた。

時 場所 ごっこ遊び

事件

すぐに飽きて当然なのに、なぜあれだけ続いたか？ルースが熱心で隊長を続けていたからだ。近くにいた私たちも支え続けさせようとした。

2

時 場所 チェス

事件

ルースはチェスを見ていて、うまい手があるなどと言っていたので詳しいと思った。習いたいと思い販売会でチェスセットを買ったが知らなかった。がっかりししまって部屋を出た。

時 場所 翌日 二十番教室

事件

ジョージ先生が詩の授業をした。ルースたちのところへ行くと相談事があるといった。

時 場所 二日後

事件

中座の反対側にルースと二人の親衛隊員がいた。モイラが降りてきた。一月前に除隊されていたので、似た境遇の二人が立っていることになった。モイラが親衛隊をばかにするのでモイラに怒りを表す。ルースに惹かれていて裏切れなかったのだ。

時 場所 三年後 本館裏側一階五番教室 冬の朝 筆入れ

事件

ルースはジュラルディン先生に贖罪されていることをほのめかす。ほのめかすだけで私たちが勝手に想像するように仕向ける。筆入れは先生からのプレゼントと暗にいつている。

時 場所 授業開始

事件

くよくよ思いつづけない。

時 場所 五番教室の出来事 目立つ筆入れ事件

事件

ルースに勝ち逃げは許さない。先生のプレゼントではない。それでは誰から？

時 場所 販売会 購買者名簿

事件

次の販売会ですきを見てページをめくる。

時 場所 本館正面玄関脇の軒下

事件

二人で雨宿りする。販売台帳を見たと言う。

時 場所 一ヶ月

事件

あらゆる空想や妄想を描いた。目の前に取り乱したルースがいる。筆入れのことでルースは嘘をついた。無邪気な白昼夢を一步先へ進めただけだ。私は何のためにしたのか？最も親しい友人を苦しめた。みじめになり混乱した。

第六章

1

時 場所 軒下

事件

ルースは感情をむき出しにしない。見せびらかさない、ほのめかす。私は搦め手で行こうとした。ジェラルディンにとってルースが特別な生徒であることを印象づけようとする。

時 場所 雨 屋外練習が不許可

事件

ルースが先生に頼めばOKが出るかもと言うと彼女は何となくうれしそうだった。

時 場所 教室を出る時

事件

ルースを先に行かせ、先生と出られるようにしてやった。彼女は一瞬驚き、うなずき素直に前に行った。

時 場所 ロジャー先生の美術の授業

事件

先生は途中で教室を出て行った。ミッジが筆入れのことを聞くと、ルースはここにはないと答える。さらにどこで手に入れたかを聞かれルースの様子がおかしいと思い、わたしはそんなの教えられるわけないじゃんとして入ると、ミッジはがっかりした。ルースは複雑な表情をし、仲間たちは同意した。

時 場所 販売台帳

事件

ルースに仲直りを持ちかけられない。ルースはミッジの詮索をさえぎってくれたことに感謝しがっている。表立ってできなかった。

時 場所 一ヶ月後

事件

私は大事なテープをなくした。ルースは求めている機会を待った。

2

時 場所 テープ ジュディ・ブリッジウォーター『夜に聞く歌』

事件

私は音楽を聴く暇がない。今年いっぱい介護人をやめる。

時 場所 ロストコーナー ノーフォーク

事件

ロストコーナーは忘れられた土地の意味で遺失物置き場の意味があるとエミリ先生はイギリス地理で教えた。

時 場所 十二、三才

事件

たわいない冗談になっていた。

時 場所 ヘールシャム

事件

食料品や販売会用の品物をのせたトラックが来る。落とし物、忘れ物を満載したトラックがノーフォークに来る。ルースはなくしたものはノーフォークに行けば見つかるという。

時 場所 数年後 ノーフォークの海岸

事件

なくしたものと同一テープを見つけ出し感動した。

3

時 場所 ジュディ・ブリッジウォーター『夜に聞く局』一九五六年LPレコード

事件

販売会でこのテープを見つけた。ヘールシャムでは保護官が喫煙にとっても厳しい態度をとっていた。

ハーシー先生にタバコを吸ったことがあるか尋ねた。マージに辛く当たった。

4

時 場所 十一才 「わたしを離さないで」

事件

ウォークマンは数年先で、プレーヤーは限られた部屋にしかない。死ぬほど赤ちゃんがほしいのに産めないと言われている。奇蹟が起こり赤ちゃんが生まれる。その人は赤ちゃんを抱きしめて、わたしを離さないでと歌う。

時 場所 晴れた日 午後 寮

事件

一人きりでカセットを聞く。枕を抱いて、赤ちゃんを抱いているように体をゆする。
マダムが内側を覗き込むようにして泣いていた。寮から走り出ていった。

時 場所 数分後 仲間のところ

事件

仲間は私の様子がおかしいことに気づき聞いたが黙っていた。

時 場所 二年後

事件

トミーに話した。彼は赤ん坊を抱いているのを見て悲劇と思ったと言う。私たちは誰も赤ちゃんを産めない体だ。

5

時 場所 二、三ヶ月後

事件

テープがなくなる。大切なテープはどこにもない。尋ね回る。

時 場所 次の朝

事件

テープは戻って来ない。

時 場所 美術室の出来事から一月

事件

ルースは何か親切を返す機会を探していた。

時 場所 あの雨の日 軒下

事件

販売台帳を口にした。テープをなくすことで初めて正常に戻った。テープの紛失は重大事だ。

時 場所 次の朝

事件

バスルームから帰る。ルースはハナにテープを見ていないか尋ねる。

時 場所 二週間後 芝生

事件

年長二、三年と雑談する。ルースは小さな紙袋を渡す。わたしは中からテープを取り出す。『ダンス曲二十選』というテープだった。彼女は音楽のおの字も知らない。このテープが前のテープの代わりになると信じて手に入れてくれた。感謝の念と幸福感が湧いてきた。ルースがいなくなった今、残された大切な宝物だ。

第七章

1

時 場所 最後の数年間 十三才から十六才

事件

巢立つまでだ。これまではそれ以前になる。

時 場所 池の端 トミーとの立ち話

事件

転換点になる。後込みしていたが、直視し疑問を持つようになる。ルーシー先生を重要な手がかりを得るための情報源として把える。

時 場所 一、二年 池の端から数週間後 ルーシー先生の英語

事件

第二次世界大戦で捕虜になり収容所に入れられた兵士のことが話題になる。ほかの保護官と少し違うと思う。

時 場所 土砂降り 体育館で雨宿り 十五才 最後の一年

事件

ピーターが映画俳優になれたらいいと言う。ルーシー先生は、いい加減な話が横行している、教わっているようで教わっていない、アメリカに行けない、映画スターになれない、スーパーで働くこともできない、人生は決まっている、老年はない。いずれ臓器提供が始まる。そのために作られた存在で、提供が使命だ。保護官とも違う。将来は決定済み、空想はやめなければならない。ヘールシャムを出て最初の提供をする。

時 場所 数年前 ドーバーの回復センター

事件

トミーは何をいつ教えるか、全部計算されていたと言った。これは陰謀説のようだ。保護官が狡猾と思えない。

時 場所 六、七才の頃

事件

提供のことを知っていた。

時 場所 十三才 性教育始まる

事件

赤ちゃんを生めないという重大事実も教えられた。エミリー先生は等身大骨格模型でセックスをどうするか見せた。外の世界での性行為には慎重に、大きな意味を持つ、殺し合いも起こると教えた。

外の人が性行為で赤ん坊ができる、あなた方には生まれえない、外のルールに従って性を特別なものとして扱えと話した。

私は教わっているようで教わっていないとはこういうことだと、提供とその周辺の話題に対する態度が大きく変化した。

時 場所 十三才

事件

様子が変わり始めた。提供について語ることはタブーだった。

2

時 場所 カラス仮面

事件

トミーが肘に切り傷を負った時、カラス仮面のところへ行った。四角い絆創膏をはっただけで帰ってきた。一年上のクリストファーが肘が悪いと言った。トミーは肘をまっすぐにしていた。

時 場所 ポロシャツの一件

事件

汚れると注意してやったことで二人の間には特別な友人関係のようなものができていた。

トミーは眠っている間にも腕が曲がらないように添え木をしてほしいと頼む。

時 場所 夜八時 中央階段

事件

トミーが下りていくとどっと笑いが起こる。トミーは一言も返さない。

時 場所 ファスナーで開閉

事件

提供全般についての冗談としてはやり始めた。ファスナーを引っ張るとそこが開いて腎臓でもなんでも取り出して手渡せる。

トミーはいつもこの冗談を厭がっていた。二人は提供の話題から後込みしなくなった。

時 場所 あの日以降

事件

提供についての冗談は影をひそめ物事を真正面から考えるようになった。

時 場所 ヘールシャム最後の年 初夏のある朝 二十二番教室

事件

ルーシー先生を見かけた。先生が難しい立場にあったことはわかっていたが支えるための行動など思いつかなかった。

第八章

時 場所 十六才

事件

授業を終えて中庭に降りる。忘れ物に気づき四階に引き返すと、ルーシー先生が一人黒い髪に覆い被さっていた。

時 場所 夏

事件

何かが起こる。

時 場所 数日後

事件

トミーは先生との間に重大な出来事があった。わたしは問い詰めなかった。

時 場所 数年前

事件

トミーはむら気で癩癩持ちだ。ローラが背中にウンチと言うと怒りの形相でローラをにらんだ。

時 場所 カレンダー

事件

二年下のパトリシアは絵の腕前が高く、カレンダーは人気だ。私はそのカレンダーを手に入れトミーに見せるとカレンダーを突き放し歩いて行った。

ルースとトミーの仲違いがあった。十六才でセックスとその周辺について混乱していた。

時 場所 規則 九時以降 男女寮訪問禁止 教室 夕方以降立ち入り禁止

事件

規則違反でもしない限り大したことではない。セックスは美しいは建前だ。

時 場所 表面化したケース

事件

昼食後机の上でした。ハナは保護官はセックスさせる義務がある、アネットは私たちのセックスを見ると保護官もしたくなるという。

時 場所 数年前 最後の夏

事件

セックスが強迫観念になった。親友二人は経験済みだった。エミリ先生は本当の相手が見つからなかったらやめなさいと忠告した。

時 場所 春頃

事件

誰かとしてもいいという思いが沸いた。今後のため慣れておく必要がある。練習なら好きでなくてもいい。一年上のハリーは経験済み、相手は一年上のシャロン、気がある素振りが何度かあった。

エミリ先生は十分に濡れていないと痛いだけで大失敗に終わると注意した。わたしは何度も一人で練習した。性描写のある本を読んだが役に立たない。細部は書いてない。

時 場所 二年前 ビリヤード室 ビデオプレーヤー

事件

濡れ場、性行為が始まるところで終わる。

時 場所 『大脱走』

事件

鉄条網を飛び越えるシーンで巻き戻しの大合唱が起こるが、セックスシーンではない。

時 場所 夏

事件

準備が整ったのでハリーに合図を送り始めた。ルースとトミーの破局があった。

第九章

1

時 場所 二人の仲違いから数月後美術室 静物木炭画

事件

私は画板を膝に置いて作業する。トミーとは長年の友達だ。後釜に映る。

時 場所 翌日か二日後 体育館

事件

ハナと出てきた。彼女はトミーは一人で寂しそうと言う。ハリーとの初体験計画にまっしぐらだ。噂に気持ちを乱されたせいか計画を実行できない

時 場所 二年前 ウイルトシャー回復センター

事件

提供を終えて運ばれてくるハリーを見かけた。突然セックスをしたいかといって逃げ回っていた私を覚えていたか？昔の感謝の念を思い出し介護人になればと思った。元気になってと言うと疲れた表情でにこりとした。ルースとトミーが別れ計画はめっちゃめっちゃになった。

時 場所 一週間

事件

ハリーには思わせぶりの言動をし、言い訳ばかりした。

時 場所 二週間

事件

ハリーを断り続ける。

時 場所 ある年の夏 ウォークマンセッション

事件

一台のウォークマンを囲み、イヤホンを次々に回す。夏は終わっても流行は続いた。

時 場所 ある日 ウォークマンセッション

事件

ルースが来て話したいことがあるというので寮の部屋に戻る。

時 場所 寮の部屋 ハエテニス

事件

トミーとはよりを戻したい、話してくれればいいと頼む。橋渡しなら適任かと答える。二人で新しくやり直したい、トミーはあなたを尊敬している、助けてもらいたいと言っている。

説得して一緒になったらトミーを傷つけないか尋ねると、本気だもうすぐここを出て行くと答える。トミーに話してみると、トミーの言う通り困った時あんたほど頼りになる人はいないという。

2

時 場所 数日間

事件

トミーと話す機会がない。

時 場所 その次の日の昼休み 南運動場

事件

トミーはサッカーボールで遊んでいる。カレンダーを見せたら不機嫌になった日からあまりたっていない。

ルースと別れたことは誰だって知っていると言うと、うまくいってない、誰にも話してない、君にどうしてわかる、そっちは気にしていない、ルーシー先生のことを言う。

時 場所 夏の始め

事件

トミーとルーシー先生の間になにがあったか知った。

時 場所 二十二番教室

事件

ルーシー先生が書類を塗りつぶしているのを見かけた。数日後の出来事だ。もっと早くトミーを問い詰めていればよかった。

時 場所 授業後 本館

事件

ルーシー先生は両腕一杯荷物を持っていた。トミーは運ぶと言うと持たせてくれた。先生はトミーに話したいことがあると言った。

時 場所 先生の部屋

事件

先生は絵が下手でもいい、書かなくてもいいといったのは間違い、くずみみたいな絵を描いていいわけではないと言った。

絵は重要な証拠だからというだけでなく、自身のために重要という。マダムや展示館に関係があることかと聞くとあれも重要と答える。先生はぎゅっと抱きしめてくれた。

私は近いうちによく話し合おう、この夏にはここを出ていく、心の整理をしなくては。ルースがやり直そうと言っていた、だめにしないでと言った。

トミーは簡単にはいかない、考えることがありすぎると言う。答えが静かで思慮深い。ルースと焦ってよりを戻したくない。次にどうするか二人でよく考えたいと言う。

時 場所 寮

事件

帰る。目的を果たせなく残念だった。ルースを裏切ったような後ろめたさがある。

3

時 場所 翌日 大ニュース 午前中 文化講習の授業

事件

外の世界の人の役割を互いに演じあう。

時 場所 終わって出る 十二番教室

事件

シャルロツテがルーシー先生が辞めるというニュースを知らせた。トミーは男の子から知った。二人のよりが戻ったのはその夜だ。ルースは手際よくかたづけてくれたことに感謝する。何かにつけて味方する。

第二部

第十一章

1

時 場所 コテージ

事件

二年間で論文を書く。ビクトリア時代の小説をテーマに選ぶ。エミリー先生に伝えに行った。

到着後数日間、最後の課題に必死に取り組んだ。

時 場所 サービスエリア

事件

コーヒーを飲みながら自動者道を眺める。介護人をやめて論文を完成させようかと思う。

時 場所 ヘールシャム卒業生

事件

コテージに来たのはわたしを入れて八人、ウェールズにあるホワイトマンション、ドーセットにあるポプラファームに行った。

時 場所 コテージ

事件

廃棄した農場を利用した施設で、人が住めるように改築されている。作業リストを見せられて、先輩たちが日課表のようなものをつけていてそれに従った。

時 場所 ケファーズ

事件

不愛想なお年寄りで、週二、三回見回りに来る。

時 場所 夏の数ヶ月

事件

それ以外はいつも寒かった。保護官がいなくて心細かった。グループは全員一致で助け合った。

時 場所 数ヶ月

事件

コテージの敷地から出ることはめったにない。

時 場所 一年後

事件

先輩たちは二、三日留守にした。自分たちも同じようにした。ヘールシヤス時代は敷地の外に一步も出なかった。

2

時 場所 晴れた日 母屋の前 夏

事件

マイクロバスがわたしたちを下ろし坂の上に消えた。心細かった。

時 場所 数ヶ月 氷 霜

事件

八人寄り添っていた。先輩達はおどおどぶりを見て楽しんだ。

時 場所 その後の二年間

事件

母屋の前で呆然と過ごす。髪を長く伸ばす。

時 場所 私の部屋 黒い納屋の屋根裏部屋

事件

カフカ・ピカソについて議論した。

3

時 場所 ヘールシヤム

事件

テレビを制限されたが、コテージでは無制限だ。ルースは人前での振る舞いを改めた。先輩カップルは節度ある行動をとっていた。テレビの物真似をしていた。

時 場所 ある日の午後 草の上

事件

『ダニエル・デロランダ』を読んでいた。

4

時 場所 秋 肌寒に

事件

読んでいるとルースがあらすじを語り始めだ。いらいらする。二度された人にもしている。

時 場所 数ヶ月

事件

読書量で何かが計れる。ルースは誰が何を読んでいてもそれを読み終わっている。

トミーとはカップルだ。

第十一章

1

時 場所 最初の数ヶ月 ブラックバーン屋根裏

事件

二人にとって奇妙な時期、二人だけで話し込んだ、二人の友人関係が成立した。ほかに漏らさない合意ができた。

時 場所 ヘールシャムとコテージのセックスのあり方

事件

コテージのほうが大人で素直だ。無機的で情緒にかけていた。わたしも一夜限りの経験が何度かあった。

時 場所 屋根裏

事件

男子の品定めをし、一夜だけの関係を告白した。ルースは優しく面白く如才なく最高の話し相だ。どうしてもしたくなると誰でもいいからすると言うと、彼女はカップルだからしたければトミーとする、誰とでもいいからなんてないと答える。

時 場所 数ヶ月間

事件

ルースには自分を売り込む人間と、私の部屋に来る人間の二人が同居している。夜のルースは何のこだわりもない。

時 場所 ヘールシャム時代の宝箱

事件

わたしはダンスにほとんどそっくりとってあるといった。ルースは先輩たちは宝物なんて持っていないのでケファーズさんに捨ててもらった。新しい生活に順応しようともがいていた。後悔することを何かしていた。

2

時 場所 秋

事件

先輩たちはここにいた生徒のことは何も言おうとしない。

時 場所 介護人になるための講習会 四、五日

事件

出席に触れないのが暗黙の合意だった。

時 場所 話題

事件

間接的に言われる。たとえば「マイク流のやり方」、「デイブの切り株」だ。

時 場所 スティーブ

事件

名前が出る頻度が一番高かった人物だ。ポルノ雑誌の愛好者だ。ルースはコテージには何十冊ものポルノ雑誌があったと言った。出てくると「スティーブ部の置忘れ」と言った。

ケファーズさんは目の敵にし、生徒の部屋に踏み込み没収した。

時 場所 ある日のポルノ狩り 六、七冊の収穫

事件

ケファーズさんは抱えていた雑誌をボイラー小屋の外にある煉瓦の山に置いた。彼は忘れてバンで走り去った。

時 場所 三十分後 ボイラー小屋

事件

私は雑誌の束を取り上げ、持って小屋に入った。台上に座り雑誌を見た。女の写真が沢山あった。

時 場所 戸口

事件

雑誌の束の終わりに、トミーが現れた。そういうのが好きとは知らなかったと言う。部屋からケファーズさんの忘れ物を君が取り上げたのが見えたと言う。ポルノ写真を見るだけという、興奮したくてと聞く。そういうことになるかしらという。興奮したい見方ではない、もっとじっくり見るもんだと言う。刺激が欲しかったのではない、表情が変だった悲しげで怖がっていた。

私を見かけてきてくれたことに慰められた気がした。保護されているように感じた。

第十二章

時 場所 ノーフォークの旅 コテージの最初の冬の終わり

事件

ルースはクリシーとロドニーが友達のところへ行くという。そこで働いている人が私のポシブルではないかと言っている。

わたし達は普通の人間から複製された存在だ。複製元が親で、親の可能性があるという意味でポシブルと呼んでいた。目安は二十才から三十才だ。親がどんな人間か見れば自分がどんな人間でありえたか分かると信じていた。ポシブルの目撃報告は短期間に集中した。

時 場所 クローン

事件

ロドニーがルースのポシブルを見つけたと喚きたてた。

時 場所 コテージ最初の夏

事件

クロークがわたしの手を引いてくれた。親しみを感じ頼りにした。ヘールシャムを意識しているので距離を置いた。

時 場所 あの冬 コテージ

事件

将来の夢が盛んに語られた。クリシーとロドニーの話は、ガラス張りのオフィスで働く女性だ。ルースの将来の夢と一致しすぎていた。

時 場所 ヘールシャムを出た直後 半年間

事件

自分たちが何者なのか忘れていられた。制約を離れ無の状態では人生を考えていた。我を忘れて将来の夢を語り合った。郵便配達や運転手を希望した。

夢が語りあわれているとき、ルースは饒舌・能弁だった。

時 場所 強い寒気

事件

二人で点火油を買いに行った。ルースがいきなり立ち止まった。

時 場所 色鮮やかな雑誌

事件

ルースは足下の雑誌をじっと見ていた。オープングラスのオフィスと談笑する三、四人の男女の写真だ。ルースは、これこそ働きがいのある職場だと言った。

時 場所 数ヶ月後 母屋 暖炉

事件

ルースが理想の職場について語り始めた。

時 場所 ルースのオフィス

事件

ルースは働く人々は活動的で前向きという。完全に乗り気だ。オフィスで働くという発想が奇想天外だ。が、ヘールシャム出身なら可能と思えた。

時 場所 旅

事件

クリシー、ロドニー、ルース、トミー、わたしの五人全員で行く。

第十三章

1

時 場所 メチリー村

事件

コテージから二マイル行ったところにある。そこの農家からロドニーが一日だけ車を借りて運転する。ルースは小旅行を冗談程度にしか考えていなかった。ポシブル探しには期待している。

時 場所 遠出の前日

事件

わたしはルースと散歩した。

時 場所 台所 シチュー

事件

先輩数人が作っている。ルースは背中がこわばっている。顔に動揺がある。

時 場所 翌日早朝 ローバー

事件

運転席にロドニー、助手席にクリシー、三人後部に座った。まん中のルースが前の二人に

話しかけた。

時 場所 一時間 夜明け

事件

ロドニーは車を止めた。わたしはルースに席を変わないかと言った。ルースはわけのわからないことを言うと怒る。

時 場所 海辺の町 昼近く 駐車場

事件

全員興奮していた。車を置き、街の中を歩くことを楽しんだ。

時 場所 小さな喫茶店 一番奥のテーブル

事件

わたしは喫茶店は始めてだ。小さい店と思った。

時 場所 ビラ「LOOK」 Oが両目 中に瞳

事件

ルースはへえと思っていた。二人はおかしく吹きだした。ルースと私の間の空気は一瞬を除いて険悪なままだ。

2

時 場所 町

事件

ポシブルのことは話題にもならなかった。トミーがルースのポシブルはどこで見たかと聞くとロドニーは大通りから引込んだところと答える。先輩たちが旅行に出かけた時、ポシブルを口実に使っていた。

クリシーは女の子は衣料品店で、男の子は公園の管理人をやっていると言う。二人が愛し合っていて証明できれば提供まで数年間一緒に暮らせるという。

時 場所 猶予の噂

事件

過去にもあった。コテージで頻繁に耳にした。クリシーとロドニーはこの話題を繰り返し語り合い考え合った。クリシーには恐れと希望、ロドニーには緊張がある。

時 場所 レジ

事件

私は会計役だ。一列になってつづく。釣りを待っている間、みんな先に出る。

第十四章

1時 場所 外

事件

わたしたちに高揚感は少しもなかった。

時 場所 小さな裏通り 狭い歩道 大通り

事件

ほっとした。ロドニー、クリシーはヘールシャムの秘密を隠していると信じ込む。ルースはロドニーの協力がなければポシブル探しはできないと思う。

時 場所 ウルワースの店 大店舗

事件

全員が入る。ロドニーはカード棚の周りをうろつく。トミーが音楽家カセットを漁る。ルースはクリシーと話している。クリシーは誰のところへ行くか考えるという、ルースは間に合わせればいいといい、わたしに気づきしゃべるのをやめる。わたしが二人のほうを向くと二人とも怒った顔でにらみばつが悪そうに離れた。

ロドニーの案内でルースのポシブルがいるオフィスを探し始める。道を間違えてばかりいた。

時 場所 オフィス

事件

雑誌の広告とそっくりだ。快適そうで見映えのする世界だ。ルースは不安そうに眼が動く。クリシーはどれがポシブルか聞くとロドニーはあそこの隅っこの青服と答える。ポニーテール、笑い終わりに首をふる。全員女性を見続けた。笑いながら慌てて歩き出した。

時 場所 通り

事件

皆安心して一斉に喋る。ルースは黙ったままだ。安心してコテージに戻る。ルースには希望が生まれる。

時 場所 十五分 駐車場

事件

誰もポシブルのことを口にしない。オフィスから女性が出てくる。通り過ぎる。女性を追いかける。

時 場所 大通り 午後二時前後 買物客

事件

なんとかついて行く。

時 場所 ポートウェイスタジオ

事件

女性が入る。たむろしていると怪しまれるから入る。画廊のモチーフは海だ。わたしは夢の世界に迷い込んだ気がする。やがて立ち上がり出ていく。

時 場所 長い講義

事件

婦人の講義が終わり外に出ていく。

時 場所 広い通り 海岸沿いの崖の縁

事件

クリシーはあれはルースじゃないと言う。ルースは何か考えているように見える。ロドニ

一は善意でやったことで結果が伴わなただけだと言った。トミーは親が見つかったって何が変わるという。ルースは最初からばかばかしいと思っていたと言う。

時 場所 強風

事件

ロドニーはマーチンを訪ねると言う。ルースは親はああいう普通の人ではない、アル中や売春婦、犯罪者だ。クローン人間の元を聞いたらどうだ。ポシブルはどぶ、ごみ箱、下水道を探す。

時 場所 マーチン

事件

マーチンの家に行こうと言うとクリシーはルースを誘う。わたしは行かない。ロドニーは四時に車に戻るようと言う。トミーはわたしにつきあい残る。ルースは怒りににらみつけ背を向けて歩き出す。

第十五章

1

時 場所 三人と反対の方向

事件

二人で歩き出した。トミーは親がどんなだって何の関係があると言う。ウルワースの店である物を探していた。昔なくしたテープを探した。ノーフォークに行ってみつけると言う。

時 場所 裏通り

事件

ノーフォークはイギリスのロストコーナーだ。

時 場所 ジュディ・ブリッジウォーター 『夜に聞く歌』

事件

ウルハースは最新の曲が多い。昔の人の曲で販売会で見つけた。どこから探すか聞くので中古品の店と答える。

時 場所 古本屋 中古掃除機屋

事件

無縁だった案内役交代を宣言し、それが成功する。それらしい店が四軒並んでいる。テープ探しという口実で楽しい時間を過ごし見つかれば終わる。トミーを呼ぶ。これがそうと言うとなくした奴と同じものかと言う。

時 場所 カウンター

事件

トミーは買ってやることはできるとカセットテープをひたくり向かう。

2

時 場所 店を出る 急な坂道を登る 展望台

事件

トミーはクリシーもロドニーも愛し合っていたら提供を猶予してもらえると一杯だ。ヘルシヤムでは誰も言ってなかったと言う。展示館の理由、マダムがいい作品だけ持って行く理由もわかると言う。マダムの展示館には小さいころからの作品がつまっている。作品で相性を見る。作者の魂を映し出しているからと言う。

だからルーシー先生が謝った。展示館に作品がなければチャンスもないから。おれはチャンスをドブに捨てた。わたしは全身に悪寒が走った。絵は判断材料の一つに過ぎないと言うと、他にどんなものがあるのかと言う。展示館が重要で、保護官が絵をかかせ詩を作らせた。

時 場所 あの午後のこと
事件

一人テープを聞いて枕を抱いて体を揺らしていた私をマダムが涙を流して見ていた。恋人ができた時、提供開始の猶予を認めるかどうか決める。冷淡な視線を向けていたが心を動かされたのだ。

時 場所 坂道

事件

引き返し始めた。ルースには話したのか聞くと彼女は全部信じていると答える。

時 場所 狭い裏通り

事件

架空の動物のことを聞いたのは始めてだ。トミーは万一を思ってやっていること〇して黒い手帳に十頭以上の架空の動物を描いた。

時 場所 大通り

事件

申請の方法一つにしてもどこにするのか何一つわからないというとなんでも思いつく方法はマダムを探すことだと答える。

3

時 場所 駐車場 雲 肌寒い

事件

トミーはあのテープは誰が盗んだのか、ああいうモデルが親だって理由があるのか、ボイラー小屋のことはだれにも言わないと話す。

わたしは親はどんな人か誰でも気になる、親がいるからわたしたちもいる、ああいう雑談の中に親が見つかればあの衝動の説明になると言う。

トミーは保護官はふさわしい相手とのセックスはすばらしく心地いいと言っていたと言う。わたしは最近ずいぶん我慢できるようになったと答える。

時 場所 帰りの旅

事件

和やかだった。ルースは埋め合わせにやっきになる。わたしとだけ上機嫌だった。車内は上々でルースのポシブルについて口にしない。三人は昔ながらの仲良しだ。

第十六章

1

時 場所 ノーフォーク行き

事件

旅のことをしゃべらなかつた。テープのこともルースに言いそびれた。彼女は沈黙している。

時 場所 春

事件

一人一人訓練のため先輩たちが離れていく。

時 場所 四月頃

事件

コテージの生活は以前の気楽さに戻らない。アリスとゴードンは訓練開始を願い出た。去っていく人数は多い。愛し合っていると認められ提供開始を猶予されたと噂が立った。

時 場所 ある日の朝

事件

トミーは架空の動物の絵を見せた。

2

時 場所 「ガチョウ小屋」納屋 ノーフォークの旅から二ヶ月以上

事件

散歩しているとトミーの呼ぶ声がする。ルースには先週見せた。これは二冊目で一冊目は見せられない。私は初めて見た。細かく丁寧で保護官の教えからかけ離れている。空想動物に心を奪われた。トミーは書きながらどう身を守るか、どう食べ物を取るか心配になる。

秘密にしたいからってこそこそしてたらそっちのほうがおかしいと言うと秘密にしておく理由もないかなと喜んだ。ガチョウの小屋を出る。

時 場所 夏 一週間

事件

ヘールシャムが遠い過去のものになる。ルースは忘れたふりをしている。新しい生徒の一団にヘールシャム出身は一人もいない。

時 場所 ある夕方 古びたバス待合所

事件

ヘールシャムではルバーブ畑を突っ切って池に行く近道が禁止されていたと言うとルースはポカンとした表情をした。

時 場所 ある日の夕方

事件

セックスだけの先輩レニーが訓練を受けると出て行った。ルースは励まし助けてくれた。

時 場所 二週間 真夜中 屋根裏部屋 カセットの山

事件

ルースはカセットの背を調べジュディの曲を偶然見つけた。トニーが見つけてくれたのかと聞くので私が偶然見つけたと答えた。

トミーの動物を冗談の種にする。ハースはその絵を軽く見ている。

時 場所 数日後 教会墓地 棚の下のベンチ

事件

ルースだけでなくトミーもいた。ルースはトミーの話を聞いていた。私は正しい可能性だつてあるといった。ルースはこの絵の裏に何があるか聞き出したと言う、トミーは展示館のことが当たっていたと言う、動物の絵の展示館入りをしないという。ルースはちっぽけな動物を見てマダムが動いてくれるという考えがおかしいと言う。

時 場所 あの夜 屋根裏部屋

事件

ルースは冗談なら文句を言いたい。真剣なんておくびにも出さないで言う。キャシーと私の笑いものならいいが、他人にまで笑われるのはやめてと言う。

あの時何かを言うべきだったが何も言わず何もしなかった。二人に背を向けて去る。

第十七章

1

時 場所 教会墓地の小さな出来事

事件

絡み合っていた三人の人生がばらばらになるとはあの時思ってもみななかった。論文の重要性が薄れていった。わたしと二人の仲、トミーとルースの中も以前とは違った。

時 場所 コテージ二年目の夏

事件

トミーに話すことはなかった。

時 場所 古びたバス停留所

事件

わたしは少し話し合っ解決しておくほうがいいというルースにはばかばかしいことだった。あんなことで喧嘩するなんてと言った。

トミーはルースが言うかするかしたことで動揺しているというそうだと思う、気にかかっていると答える。

動物のことはまずかった、トミーには謝った。よかった。ハースはトミーとカップルを解消することもあるという。トミーは付き合ってたような女性は相手にできないと言う。

時 場所 年少組のころ 池の脇 ピクニック

事件

ジュラルディン先生と池の脇でピクニックをした。ケーキを取りにジェームズが言いつかった。運んでくる途中強い風が起りスポンジが吹き飛ばされてルバーブの葉の上に落

ちた。ジェームズはルバーブ畑を通ったことがばれるから困った。ルースは何で困ると言った。あの道が禁止されていることを覚えていないと言い、争う。二人の間の空気が元に戻らなかった。

時 場所 まもなく ある朝

事件

私は介護の訓練を始める決心をし、ケファーズさんに言いに行った。彼は午後に来い、書類を書いてもらうとつぶやくハースは決心を変えさせるかも知れない。彼女との間に一定の距離を保った。トミーとも同様だ。コテージで二人とまともに話し合うこともない。

第三部

第十八章

時 場所 介護

事件

介護人はわたしに向いていた。苦痛と不安ばかりまじかに見る。提供者が使命を終える瞬間が来る。二回目の提供でも起こる。

時 場所 孤独

事件

すべてひとりになる。ひとりで何時間もいなかみちをはしり、センターからセンターへ病院から病院へ移動する。

時 場所 ビジネスホテルに一泊

事件

相手もない。知り合いは介護人か提供者だ。あちこち飛び回り細切れの睡眠しかとれない。

時 場所 介護人

事件

やめられる日、提供者になれる日を待っている。

時 場所 年末

事件

すべて終われば仲間との交流ができる。孤独にも慣れるし悪くない。

時 場所 余裕

事件

ウィンドーショッピングがある。

時 場所 アパート

事件

デスクスタンドを四つ置いてある。

時 場所 サービスステーション 駐車場

事件

運転席にローラを見かける。コテージ以来十年ぶりだ。よれよれの青いアノラックを着ている。

時 場所 二十分

事件

彼女は疲れている。提供者の一人が気難しい。話し相手になってくれれば誰でもいい。

時 場所 数年前 診療所

事件

ローラはルースと鉢合わせした。介護人だった。ルースはキャシーがいなくなってひどくなった。ハナに何回かあった。ルースの最初の提供はひどかったようだ。提供者を選べるならルースの介護人になってやったらどうかと言う。

ルースとすごく親しかったというので、最後はそうでもなかったと答える。

時 場所 ヘールシャムの閉館

事件

ヘールシャムがなくなったことで突然昔の親友同士になり抱き合った。

時 場所 一年前

事件

ヘールシャム閉鎖の噂を耳にした。

時 場所 サフオークの診療所

事件

出てきた時、一年下のロジャーに会った。全てホテルチェーンに売却されるというので生徒たちはどうなるか聞いた。彼は国中のあちこちの施設に移されるだろうと答えた。わたしたちはヘールシャムで育ったという共通のことで結ばれている。

時 場所 その日の夜 ビジネスホテルの一室

事件

数日前のことを思い出す。ピエロの格好をした男がヘリウム風船を十数個持って歩く。ロジャーは閉鎖は自分たちに関係ないと言ったが、あそこの日常がなくなる。

時 場所 ロジャーと会って数ヶ月

事件

閉鎖の意味することは時間切れだ。すぐにも行動を起こさないと機会は永遠に失われるかも知れない。ローラの言葉使いが介護人になりことを決めた。

2

時 場所 ローラとあって数週間後 ドーバーの回復センター

事件

訪れた。ルースは最初の提供から二ヶ月後手術はひどかったと言った。ナイトガウンを着ていた。

一緒になれて喜んだ。希望の持てる第一歩だ。毎週三、四回午後遅く行く。ミネラルウォ

ーターとビスケット一箱を持っていく。会話が途切れる。

時 場所 ある日の午後 シャワー室

事件

一時間早く着いた。先に部屋に入っている。ルースはタオル一枚で入ってくる。強い警戒の表情をしている。どちらにも衝撃を受け、互いに信用していない。雰囲気は悪くなる一方だ。苦痛でルースの介護人をやめる決心をしたが、船の出来事で一変した。

3

時 場所

事件

センターからセンターに駆け巡る。

時 場所 船一隻 湿地で座礁

事件

船の噂をわたしは北ウェールズで二人の提供者から聞いた。ルースは数日後に聞いた。

時 場所 その後しばらく

事件

ルースは漁船の話題を持ち出した。見たいのか聞くと、見たい、ここに居続けだと答える。トミーにもあってくるべきか聞くと、会いたい、コテージ以来だと答える。ついにトミーの話題に辿り着き二人ともほっとした。

時 場所 あの秋

事件

ルースは、つづいてコテージを出るころには二人に気持ちは離れていたと言った。

時 場所 数週間 漁船見物

事件

ルースは毎回その話題を持ち出した。何となく計画が出来上がった。わたしは仲介者を通じてトミーの介護人と連絡をとった。来週ある日の午後、二人でキングスフィールドのセンターを訪れる。

第十九章

1

時 場所 キングスフィールド 設備の後れた回復センター

事件

二人で何度も地図を見ながらドライブした。ルースがいるドーバーの回復センターとくらべものにならない。

時 場所 50年代後半から60年代前半の写真

事件

娯楽施設だった。トミーには薬品のような匂いがした。

時 場所 車

事件

わたしは運転し、トミーは後部ドアを開け乗り込んだ。二人は長いブランクなどなかったかのように振舞った。船のこと以外話すことはなかった。見に行ったか聞くとトミーは行きたかったがダメになったと答える。ルースはトミーを見つめる。トミーは居心地悪そうで目のやり場に困った。ルースは提供者のことを話し始めた。わたしがその人のことはそれくらいで十分というトミーは笑い出し同じことを思っていたという。わたしは賛成してくれたとトミーの一笑いで一声で一気に二人が近づけた気がした。

時 場所 出発は二十分 曲り角 狭い道

事件

車を止めて歩く。手書きの道順を広げる。二人はわたしの支持を待つ。ルースは息遣いが荒くなる。

時 場所 有刺鉄線

事件

ルースはこんなものがあるなんてと言う。わたしは下をくぐると言う。トミーはルースの体力の衰えぶりにはじめて気づく。反対側の肘を支える。トミーがくぐり抜けるとルースは屈めばいいのかと言う。わたしは道順を見て先頭に立つ。彼女は黙って受け入れた。わたしはルースの肩を抱きかかえる。足取りはおぼつかない。

時 場所 空地 船 湿地

事件

足が革の下に沈み込んだ。ルースは友達が言ったとおりのこと。どうやらここまでのようだ。

時 場所 朽木

事件

座礁している船をじっと見つめる。二人は別の朽木に行く。

時 場所 船 ペンキはげ 柱が崩れ

事件

どこからどうやって来たか？トミーがヘールミヤムもこんなかと言うとルースは閉鎖になったからって沼地になるわけではないと言う。

ルースは十四番教室にいる夢を見た。平和で静かでどこかでこんな感じかと言う。トミーがメグが三度目の提供とでていったと言うとルースはメグでなくクリシーが二四回目の提供で使命を終えたと訂正する。わたしがそんな陰謀みたいなことはないと言うとルースは公表されるよりも多いと言う。提供のたびあちこち移動させられるのもそれがからんでい。わたしが、ロドニーに会った、クリシーが終えてから間もなく、北ウェールズの診療所で元気そうにしていたと言う。

ルースはクリシーのことでずたずただったはずだ、本当のことなんて半分も話してくれないと言う。トミーは二四回目の提供で使命を終えるなんて無念だったろうと言う。

私はロドニーのような立場の人ならたくさん見てきたと言う。ルースは介護人のキャシーになんで分かると言う。わたしは介護人だから多くを見るという。

トミーは運転も覚えられずすぐ一回目の通知が来た。提供者としては優秀だが介護人としてはダメだったと言う。ルースは介護人として五年やった。いつ通知が来てもいい、使命だといった。わたしは提供者の近くにいるとお互いいつもそういうことを言い合っていると言う。二人とも船に見とれて満足する。

2

時 場所 車に戻る

事件

三人の会話が弾む。二人はほかのセンターについて尋ねる。

時 場所 有刺鉄線

事件

ルースはためらいなくくぐり抜ける。

時 場所 看板のポスター

事件

ルースもう少し新しいこと思いつかないかと言う。トミーは気に入っていると言う。わたしはああいう形に作るのは大変だと言う。ルースは怒りはなく神経を張り詰めている。

時 場所 停車

事件

路肩に寄せてとめる。談笑する男女のポスターを見る。ああいうオフィスで働くとルースは夢中で喋った。わたしとトミーはトライしてみてもよかったという。

ルースは最大の罪はトミーとキャサリンの仲を裂いたことだ、取り戻してほしい、二人がやってみて提供を猶予してもらってと言う。わたしは遅すぎると答える。船見物に来たのは、いま言ったことを言いたかったからとマダムの住所を渡すことだ。トミーは紙切れを受け取る。

時 場所 キングスフィールド

事件

車を止めた。トミーは下りて大きな笑顔で手を振った。わたしは路肩の会話で精根尽き果てた。ルースは疲れ切った。三人の関係はいつも壊れやすく微妙だった。

時 場所 数日後

事件

ルースとの間にあった警戒や不信の念が消えた。

時 場所 夏 午後

事件

ビスケットとミネラルウォーターを持って行く。二人ベランダに座り話す。トミーの介護人になることを考えてみたか聞く。

時 場所 二回目の提供から三日後

事件

ルースは部屋に一人いた。今回は乗り切れそうにない。何人もの提供者に見つづけてきたあの表情をしていた。

時 場所 三時間

事件

ルースは遠く自分の体内に閉じこもっていた。わたしを見上げて認めた。最後の戦いを戦っている提供者にはふっと明晰さの瞬間が訪れる、わたしはできるだけ早くトミーの介護人になると答えた。このことを彼女は最初から知っていた。

第二十章

1

時 場所 船見学後一年 キングスフィールド

事件

トミーの介護人になる。慣れ、好きになる。トミーは三度目の提供が回復していた。

時 場所 午後 昼食時 部屋

事件

トミーは午後後半眠る。わたしは訪問し朗読し話をしレポートを作成する。コテージ以降の隔ては解け昔の二人に戻る。計画を進め提供の猶予を申請する。セックスしていないことがマイナスになるかも知れない。

時 場所 ある日の午後

事件

朗読後手をトミーの下のほうへ動かすと喜ぶ。済ませてやると安らいだ表情をした。

時 場所 初回

事件

これが始まりで次の世界へ開く扉と思う。傷が治り痛みが治まれば消え去る。トミーはこうしているのは嬉しい、いまになって言うのが悲しいと言う。

時 場所 普通のセックス

事件

幸せを感じる。体全体を陶酔の渦にする。

時 場所 日の光 提供者の歩き回る音

事件

トミーは余韻にふける。

2

時 場所 最初の数週間

事件

マダムと車中会話に触れない。

時 場所 コテージを出た後

トミーの動物の絵を思い出した。

時 場所 介護人になって一ヶ月 午後

事件

トミーは丁寧に絵を描いていた。ある種の架空生物だ。

時 場所 黒い手帳

事件

三枚の絵を見せ、どれにするか決められない。架空生物をめぐってコテージで起こったことを水に流してくれると言う。安堵、感謝歓喜した。背後に何があるか理解した。

時 場所 あの日 蛙の絵

事件

絵には昔の若々しさが無い。よく似ているが何か失せている。コピーした感じた。

時 場所 夏が終わる。

事件

トミーは健康を取り戻す。四度の提供の通知の可能性もある。

3

時 場所 キングスフィールド

事件

忙しく一週間行かない。

時 場所 ある日 朝土砂降り

事件

トミーはぼんやりベッドに座っていた。到着したがくたくただった。昨日マダムを見た。ルースは所も番地も間違っていなかったと告げる。

時 場所 南部海岸 リトルハンプトン 電話ボックス ベンチ

事件

通りの向かい側にある家から目を離さずにじっと待った。前回三十分以上待ったが、今回は何かあると思っていた。マダムは通りをこちらへ歩いて考える。昔のままの服装でわたしの前を通り過ぎ家の中へ入った。

時 場所 リトルハンプトン

事件

来週トミーが健康診断を受けに行くから丸一日の外出許可を取り、帰りにリトルハンプトンへ行く。

トミーには猶予、展示館について考えてきたことが突然目の前にある。彼は動物の絵も決めないといけない。私たちはマダムに会いに行く。

第二十一章

1

時 場所 出発何日前

事件

ドアの前に立つ自分を想像し冷や汗をかく。

時 場所 その日

事件

車の調子が悪く、検査に遅れ、不手際で同じ検査を三回受けてトミーは気分が悪くなった。

時 場所 リトルハンプトン

事件

六時に着き町の中心へ向かう。トミーは何か食べたいと言う。

時 場所 歩行者天国 大通り

事件

トミーは美容院前だという。マダムが昔と同じ灰色のスーツを着て歩いている。

時 場所 芝生 海の家

事件

あのベンチに座っていた。マダムに追いつこうとした。小さな門から家に入った。話をしたいと言うと入れてくれる。

2

時 場所 家の中 玄関のドア

事件

トミーはドアを閉めた。マダムは階段を上り始めた。

時 場所 ドスン

事件

前に進み入っていく。

時 場所 居間

事件

古い家の匂いがする。

時 場所 額縁入りの絵

事件

トミーはヘールシャムだ、アヒル池の裏側だと言う。

時 場所 男の声

事件

マダムは言われた通りにすればいいと言っている。

時 場所 数分間 部屋の奥の壁

事件

マダムは二人にヘールシャムにいたのはいつと口をきく。

時 場所 一對の肘掛け椅子

事件

椅子に向かって歩く、最後まで聞いてもらおう。

時 場所 数週間

事件

何をどう言おうか繰り返し考えた。

時 場所 面会

事件

カップルが来て話し合っていると申し立てる、わたしたちも愛し合っていると、愛はそんな簡単なものではないと答える。猶予を求めに何故私のところへ来たかと問う。

トミーは展示館の目的を知っているという。作品を集めることは大変だった、何を知っていると問う。トミーは判断の基準、愛し合っに役立つか？トミーは作者がどんな人間か物語るからと答える。

マダムが続けるか問いかけると、女性の声で続けようと答える。マダムはあなたに話したくて来たのだからあなたが話してというそうだわねと答える。エミリー先生とトミーがそつと言った。

第二十二章

1

時 場所 車椅子

事件

エミリー先生の乗る車いすの後ろにマダムは立つ。先生はマリ・クロードはよく働いてくれた、二人は立派に成人したと言う。マダムは思い出せるからっていいことでもあるのと言って離れ暗がりに消えた。

時 場所 場所の交替

事件

先生はベンチに座っているところに通りかかったと言う。わたしは会えて嬉しいと答える。提供の猶予はないのか聞くと、噂には真実のかけらもない。何のための作品制作か、何枚作品を持って行ったか聞くと、作品は作者を物語る、魂がそこに見えるからだと答える。提供を猶予してもらって夢はわたしたちの力の及ばないことだと答える。先生は語る。当時の臓器提供の計画のあり方に反省を促した。生徒たちを普通の人間と同じように育てようとした。クローン人間は医学のための存在だった。戦後の初歩的段階では試験管の中のえたいの知れない存在、それがあなた方だ。

時 場所 70年代後半

事件

いい作品を集めて特別の展示会を開いた。この絵が描ける子供たちを人間以下とは言えない。

時 場所 戦後50年代初期

事件

科学上の大きな発見があり、考える暇も疑問を発する余裕もなかった。治療に使われる臓器はどこから来たか、生徒たちのことを気かけ、この世に生まれるべきかどうか考えるようになった。長い間生徒たちは日陰の存在を余儀なくされた。完全な人間ではない、だから問題にしなくていい状況だった。世界は生徒の臓器提供を必要とした。わたしたちは戦って待遇改善という成果をあげた。

時 場所 モーニングデール・スキャンダル

事件

ジェームズ・モーニングデールという科学者が能力を強化した子供を生むこと、望む親にその可能性を提供することだった。見つかり中止になった。

世間は臓器提供の生徒を作り出すことは仕方ないとし臓器提供の仕組みなど思い出したがない。

私たちがいたことであなたたちの人生が多少ましになった。

時 場所 家の外で物音

事件

これで終わりと信じられない。トミーは猶予も何事もないというと、人生は決められたとおりに終わると答える。

時 場所 廊下で大きな物音

事件

トミーはルーシー先生が亡くなった理由もそれかと聞く、否と答える。ルーシー先生は生徒たちの意識を高めるべきだ、自分が何者かちゃんと教えたほうがいいと信じていた、私達はそれは誤っていると結論した、理想主義的で現実を知らなかった、私達はだまし、嘘をつき隠し、生徒を保護した。保護がなかったら、二人は授業に身を入れることも図画工作や詩作に没頭することもなかった。マダムはあなたがたの味方だった、働き詰めだったと答える。

時 場所 玄関のドア

事件

マダムの声が外から聞こえる。二人玄関に立っていた。私は寮で体をゆすっていたのを見てマダムが泣いた理由を聞くと、無慈悲で残酷な世界に少女がいて、消えつつある世界を離さないでと懇願している、それを見て胸が張り裂けそうになったと答える。

マダムはかわいそうな子たち、二人だけでやっていくしかないと励ます。

2

時 場所 帰り道

事件

裏通りばかり選んで走った。トミーはルーシー先生が正しい、エミリ先生ではないと言う。

時 場所 数分

事件

とめてくれというので止めると外に出る。様子に何か断固としたものがある。トミーは二、三度叫び声を上げる。

時 場所 茂み 隙間 フェンス

事件

よじ登り反対側の柔らかい沢に降りた。

時 場所 野原 月明り

事件

トミーは荒れ狂っている。喚き、拳を振り回し、蹴飛ばしている。腕に飛びつき抱きかかえた。顔は泥だらけで怒りに歪んでいた。二人で抱き合っ立っていた。叫びが止み、体から力が抜ける。

時 場所 車

事件

一緒に車に戻る。トミーは謝る。おれはばかだった。心のどこかでおれはもう知っていた。君らの誰も知らなかったことを。

第二十三章

1

時 場所 帰って一週間 十月初め トミーの部屋

事件

トミーはわたしのいるところでは描きたがらない。新たに考え新たに決断した。センターにいる提供者仲間の方に向き始めたことに気づいた。

時 場所 ある日 キングスフィールド

事件

トミーは着くと顔を一度わたしの方に向け友達の話に戻った。

時 場所 一、二分位

事件

トミーは仲間と別れ一緒に部屋へ行ってくれた。トミー達がおしゃべりをしているのを見ると嫉妬した。

わたしに提供者でないから分からないと言い、怒りを感じた。汚れ物を洗濯へもって行くのはやめてくれ自分で片づける、提供者になれば分かるという。

時 場所 四度目提供通知一週間後

事件

四度目の人は不人気でも特別に尊敬される。

時 場所 夕暮れ前

事件

トミーは四度目で指名完了になるかどうか分からないという。たわごとと切り捨てこの

問題から後込みした。四度目にも無事対応できそうだ。

2

時 場所 キングスフィールド

事件

散歩に適した場所がない。

時 場所 あの朝 深い霧

事件

二人で歩き回る。トミーは介護人を変えようと思うと言う。わたしは驚いていない。先週腎臓がひどかった、これからはああいうことが多くなる、ルースの望んだのはあっちのこと、君の目の前で変なことになりたくないと言う。ルースは分かってくれた、提供者だったからと言う。

わたしは立ち去った。トミーは除け者にした。トミーは提供者仲間から遠ざけられ、トミーとルースから遠ざけられた。打ちのめされた。

時 場所 数分

事件

トミーの部屋しか行く所がない。トミーが戻ってきた。介護人を替える手続きまで話し合った。

いい介護人は必要という、くたびれないかと心配する。提供者は提供して使命を終える。キャシーは駆け回っていてくたびれ切って独りぼっちだ。ぼろぼろになる。昔から愛し合っていた人だから永遠に一緒というわけにはいかない。優秀な介護人がつくように積み込んであげると言う。

3時 場所 その後の数週間

事件

新しい介護人に引き継ぐまで平穏に過ぎた。非現実の空間にいた。

事件

時 場所 北ウェールズ

事件

二人の提供者を担当していたが、三、四回キングスフィールドに行った。

時 場所 最後の日 十二月午後

事件

すべてはいつもどおり、トミーもいつもどおりだった。わたしたちが知ったことをルースは知らないままだった。あれでいいのかと言うとトミーは同じことを考えていた、君やおれは知りたがり屋、ルースは信じたがり屋だからあれでいいと言った。

私はルースが命を終える前にすべてを知らせてやりたかった。

時 場所 車 十二月

事件

階段を下り車まで歩いた。トミーは歓喜のポーズで両腕を突き上げた。笑顔で手を振った。わたしはバックミラーで見ている。

4

時 場所 数日前

事件

ルースを失い、トミーを失った。二人の記憶を失うことはない。今年が終われば車で走り回ることもなくなる。静かな生活が始まる。遠ざけられた。打ちのめされた。

時 場所 トミーの死の二週間後 ノーフォーク

事件

ドライブした。車を止め外に出た。少しだけ空想の世界に入った。トミーが現れ手を握った。わたしに呼びかける。空想はそこまで。車に戻りエンジンをかけ行くべきところへ向かって出発した。

2 舞台

一九九〇年代末、イギリスとある。この頃イギリスに展開する。

一九八七年アメリカでウシの受精卵を取り出しクローンを作ることに成功、九六年にはイギリスで体細胞利用によるクローン羊が誕生した。日本では九〇年に誕生した。

クローン人間を誕生させ、臓器提供をさせる設定になっている。

3 人物

第一部

(1) キャシー (わたし)

三十一才、介護人を十一年以上やっている。あと八ヶ月つづければ十二年きっかりとなる。二、三年でやめさせられる人がいる。十四年働いた人でも役立たずだった人もいる。

介護した提供者の回復ぶりはみな期待以上だった。回復にかかる時間は驚くほど短かった。いつ見守っているだけになるか、いつ突き放すか適切に判断した。

わたしはアパートに住み車を持ち介護する。終わりの六年だけ相手を選べた。ヘールシャム出身ということも評価された。

特別な場所と思われていた。保護官、宝箱、サッカーラウンダーズの試合、散歩道、建物の窪みや壁、アヒルの泳ぐ池、食事、野原の景色等、何もかも理想的な施設が整えられていた。

年長組二年、十二、三才の頃体育館は隠れ家になっていた。二組のグループがいても邪魔にならないくらいに広がった。わたしたちのグループは五人でルースの力が大きかった。ルース、キャサリン、トミー、ローラ、ハナ、の五人だ。寮で年長組は六人、一部屋になる。消灯時間後話をした。

交換会年四回開かれる展示即売会だ。何かを見つける場所で友人関係に影響を与える。作り溜めた絵、彫刻、詩を出品する。

クリスティの詩が高く評価された。わたしは十一才の子は他人の詩なんかに興味を持た

ないと批判する。

ジャッキーの麒麟の絵は見事とキャサリン、ルースは一致した。トミーの象の絵は年下の子が描くような稚拙な絵だ。

トミーはルーシー先生に絵を描きたくなければ描かなくていいと言われたもう一つ教わっているようで教わっていないといわれた。将来のこと提供とかがそういうことだ。

提供のことをちゃんと教えられてないことがそういうことだ。マダムはいい絵だけ持っていく。どうするのか、なぜ絵を展示するのか、提供が始まることと何か関係があるのか、展示館はヘールシャム創設以来ずっとある。なんで展示するのか。

展示館は物心つく頃から意識にあった。出所は保護官ではない。上級生から下級生へ代々伝えられてきた。わたしの最初の記憶は五、六才の頃だ。わたしの粘土細工を一年上のアマンドが展示館行き間違いないと言った。

十一才の頃、ロジャー先生の話で大笑いし展示館行きとキャロルが言った。

マダムは年に二度三度四度と来て、いい作品を選んで持って行った。

八才、自分がだれで保護官や外部の人間とどう違うかを少し知り始めた。施設に集まって暮らし、優秀な保護官に見守られ、称える人に囲まれる育ち方をした。

五才、六才の頃、自分が外の人間とはとてつもなく違うとわかる瞬間を悟っていた。マダムのような人が憎しみも害もしないが、どう生まれなぜ生まれたかと思って身震いする。少しでも体が触れ合うことを恐怖する。マダムは実状を知っていて内心恐怖し拒否する。

支援切符論争は成長し所有欲が出て来た現れた。作品がマダムに選ばれば有頂天になった。十才、年少組四年になると何度も支援会を経験し、切符を金として使うことに慣れ、作品の値段を意識するようになった。十才になると最も価値ある作品を持ち去られた思った。

販売会は外の世界の物品に触れる場所だ。月に一度白い大きなバンが来る。年少組の生徒は人だかりする。十二、三才になると人前で興奮するのを恥ずかしくなる。五、六才の頃、ハナやローラと遊んでいた。二年後年少組に上がり七才か八才の頃年数が同じルースとの思い出が増える。

ルースは乗馬に誘う。わたしが上手に乗ると機嫌が悪くなる。七才の頃秘密親衛隊ごっこをする。隊員は六人から十人だ。ルースは隊長になり脱退させたり入隊させたりした。私は架空の陰謀頭を支える。

ルースはチェスを見て一言言う。彼女はチェスに詳しいと思い、習いたいとチェスセットを買う。チェスを知らないことがわかりがっかりする。

二年後秘密親衛隊はすっかりなくなっていた。

冬の朝、一番小さい教室で机の上に見たこともない筆入れがあった。ジュラルディン先生からのプレゼントを装った。あの笑みとあの声、指を立てるしぐさに惑わされた。保護官に鼻唄されることはありえないが、それをほのめかした。

わたしは販売会の台帳を見て確かめた。ルースは指摘され取り乱した。このことで嘘をつ

いた。ルースは嘘をついて気を引き一人特別扱いされたと思い込んだ。

何のためにしたのか？一人目立ちたかったのだ。近しい友人を苦しめた。嘘を暴いたが大したことはないと思えた。

保護官は私のためだけに規則を曲げ特別のことをしてくれると誰もが夢見ていた。一瞬の抱擁や秘密の手紙、プレゼントに心を浮かせた。規則を踏み外すことを期待したが夢に過ぎなかった。

ミッジが筆入れはどこにあるか聞くのでわたしは教えられない理由があると答えると仲間はずれ。ルースはミッジの検索をさげすんでくれたので感謝したが表立ってではない。

イギリスのロストコーナーはイギリスの遺失物保管所という意味で、国中の落とし物はノーフォークに集められる。これは十二、三才のたわいもない冗談になった。後にノーフォークに行き、なくしたテープと同じ曲の入っているテープを見つける。

一九五六年『夜に聞く歌』はレコーディングされた。わたしは販売会でこのテープを見つけた。

あの日、九才、十才の子供の頃先生が特別な生徒は内部を健康に保つことが大切だと教えた。わたしたちは自分が保護官と違うことを、外の世界の人とも違うことはわかっていた。

十一才の時、この曲に惹かれた。死ぬほど赤ん坊が欲しいのに生めないといわれている。が、奇蹟が起こり赤ちゃんが生まれる。ベイビーわたしを離さないでと歌う。

家で一人カセットを聞き枕を抱いて抱いているように体を揺らしていた。マダムが覗きこむようにして泣いていた。誰も赤ちゃんを産めない体をしているとトミーに話した。二、三ヶ月してこのテープがなくなった。部屋にいるのは近しい仲間だ。どこにもない。尋ね回るが返ってこない。

ルースは何か親切を返す機会を探していたので尋ね回る。音楽の「お」の字も知らない彼女は『ダンス局二十選』を買ってくれる。感謝に幸福感に浸る。

十三才から十六才はヘールシャム最後の数年間になる。十五才は最後の年になる。体育館で男女三十人以上が雨宿りしていた。ルーシー先生が保護官だった。男子生徒が映画俳優になりたいとかアメリカに行きたいとか言った。

先生はアメリカに行けない、映画スターになれない、スーパーで働くこともできない、人生は決まっている、老年はない、いずれ臓器提供が始まる。そのために作られた存在だ、提供が使命だ。保護官とも違う、将来は決定済みだ、ヘールシャムを出て最初の提供をと言う。

六、七才の時、この提供のことを知っていた。十三才で性教育が始まった。赤ちゃんを生めないという重大事実も教えられた。エミリ先生は等身大骨格模型でセックスはどうするか見せた。外の世界の性行為は慎重に、性は大きな意味を持つ。殺し合いも起こると教えた。外の人が性行為で赤ん坊ができる、あなた方には生まれれないと言う。

わたしはセックスが強迫観念になった。親友二人が経験済みなので何度も一人で練習し

た。性描写のある本を読むが細部は書いてないので役に立たない。

ハリーとの初体験の計画を準備するが、トミーとルースが分かれた噂に気持ちを乱され計画を実行できない。ハリーは温和な人格者でセックスなど念頭になかった。

ルーシー先生はトミーを読んで絵が下手でもいい、書かなくてもいいと言ったのは間違いだったと言う。絵は重要だとトミーを抱きしめた。

わたしはこの夏にはここを出ていく、心の整理が必要だ。ルースがやり直そうといったとトミーに話す。

外の世界の人の役割を互いに演じあった。ウェイターとか警官の役を。

(2) ルース

私の強いメンバーだ。マダムが自分達のことを怖がっていると見抜いている。キャシーを馬に乗せてやる。上手に乗るので機嫌を悪くする。見込んで秘密親衛隊に入れてやる。隊長として全体を引張る。

チェスは知らないのにチェス盤を囲み、あれこれ知ったかぶりをする。隊員を退会させたり入会させたりする。

ジュラディン先生に最真にされているふりをする。望んでもしてもらえないことをそうしてもらえているようにごまかす。珍しい筆入れを机の上において、先生のプレゼントのように見せかける。

ルースの思わせぶりが気に入らないキャサリンは販売台帳を調べ購入者を特定する。ルースは取り乱す。

筆入れのある場所を聞かれ緊張する。キャサリンの機転の利いた発言で救われる。感謝したかったが表立ってはできないでいた。キャサリンが大切にしていたテープがなくなり探す、友人に尋ねる、ダンス曲のテープを買ってあげる。真剣に対応する。

トミーと別れるとよりを戻してほしいとキャサリンに頼む。

(3) トミー

サッカーが一番うまい。癩癩もちでわめき続ける。何回か起こす。一度など机をひっくり返し中味をぶちまける。

創造意欲がない。春の交換会にも出品しない。荒れていた。謝りたかったが根気がなかった。体格がよく腕力がある。

やがて、癩癩が収まり楽しく仲良くやる。自分で成長していると思う。

ルーシー先生に無理に絵を描かなくてもいい、教わっているようで教わっていないと言われる。将来のこと提供のことを言っていると思う。

キャサリンにマダムが泣いたことを聞くと赤ん坊を生めないことが悲劇と思ったのだと言う。

肘に切り傷を負った時、キャサリンに添え木をしてほしいと頼む。築き上げた信頼関係によって頼んだ。

ルースとまずくなるとキャサリンに励まされる。

ルーシー先生は絵は重要だと言いつつ、トミーは絵がマダムや展示館と関係があり、重要だと思う。

ルースとの復縁を解かれると簡単にはいかないと答える。慌ててよりを戻したくない、次にどうするか考えないといけない。もうすぐここを出る、よく考えないと。トミーは思慮深い。成長している。

クローンの子供に家族はない。親も兄弟も親戚もない。クローンの子供が施設の一つヘルシャムに入る。そこに十五才までいる。寮に住み学校で学ぶ。先生は保護官だ。一般的な学習をする。

クローンが人間と同じ能力を持つことを説明するため展示会を開く。絵や詩を展示し、実力を示す。

接する人は寮を往復し、敷地内にいて外へ出ることはない。外部の人とは販売会で来る人、限られた人だ。

ただ一人の子供が同じ子供がいる施設に入る。友達を作り仲間を作り話し遊び学び成長する。内の世界の特色を教えられる。外の世界と外の人々と異なることを教えられる。

外の世界を知っても入っては行けない。その仕事ができない。仲間に入っていけないことが教えられ、セックスはできても妊娠はしない。子供を生むことはできない。

自分達の仕事は臓器の提供だと教えられる。提供する人になるか、その人を介護する人になるかだ。これ以外にない。使命は外の世界に臓器を提供することだ。

クローンの存在は純粋だ。一人で発生し、一人で行き、一人で死んでいく。外の世界は日常でうちに世界は非日常として対峙する。

第2部

(1) キャシー (わたし)

ヘルシャム卒業生はコテージに八人、ホワイトマンション、ドーセットのポプラファームに散った。

私はコテージに来る。廃棄した農場を利用した施設だ。三年前論文を書く。ビクトリア時代の小説について、論文が意義あるものに思えた。最後の課題に必死に取り組んだ。

先輩たちの日課表に従った生活をする。雨樋の破れを報告し、水浸しの跡をモップがけする。

不愛想で年寄りのケファーズさんが週二、三回見回りに来る。

夏の数ヶ月以来いつも寒かった。保護官がいなくて心細い。グループは全員一致で互いに助け合う。敷地から出ることさえめったにない。八人寄り添っていた。わたしの部屋は黒い納屋の屋根裏部屋だ。

ヘルシャムでテレビは制限されたが、コテージでは無制限だ。『ダニエル・デロンダ』を読んでいると、ルースが粗筋を語り始めた。誰が何を読んでいても読み終わっていて内容を話す。ハーストは奇妙な時期で友人関係が成立した。他に漏らさない合意ができた。

どうしてもセックスしたくなる。誰でもいいからしたくなるというと、ルースはカップルだからしたければトミーとする、誰でもいいからなんてない。

同情してもらって気分が治まった。彼女には売り込む人とわたしの部屋に来る人と二人の人間が同居している。先輩たちの前で多少虚勢を張った。わたしは宝箱をとってあるが、ルースは持ってきた宝箱を捨てた。

先輩たちは出かけて出会った人の話はしたがここにいた生徒のことは何も言おうとしなかった。介護人になるための講習会に四、五日出かけてもその話はしなかった。

話題ではポルノ雑誌の愛好者だったスティーブの名前が出た。コテージには何十冊も出回っていた。ケファーズさんはポルノ狩りをした。ボイラー小屋にある雑誌をわたしは見た。ページをめくり続けているとトミーが興奮したい見方ではない、刺激がほしかったからではない、表情が悲しげで怖がっていたと言った。

わたしはトミーに保護されている感じがした。クローン人間は普通の人間から複製された存在だ。だから複製元「親」がいるはずだ。それを「親」の可能性があるという意味で「ポシブル」と言う。

クリシーとドロシーがクローマブルースのポシブルを見つけたと言う。ロドニーが車を借り、クリシー、わたし、ルース、トミーの五人で出かける。先輩たちは旅行に出かけたいとき、ポシブルを使う。ルースのポシブルはオフィスで働く女性だ。ウェールズにいる女の子は衣料品店で働き、男の子は公園の管理人をやっている。

オフィスに着く。雑誌の広告とそっくりだ。快適そうで見栄えのする世界だ。中の女性を見るが、全員ルースでないとは決定する。ルースは、「親」はああいう普通の人ではない。ヤク中、売春婦、浮浪者、犯罪人だとみんな知っていると言う。複製元を誰が引き受けるか、誰になるか問題だ。

ロドニーとクリシーは猶予期間を三年から四年もらった子がいる、二人が愛し合っていて証明できれば提供まで数年一緒に暮らせてやると話す。猶予のうわさは退去にもあった。コテージで頻繁に耳にした。猶予は切実な問題だった。

規則があるかということも申請をどこにするのかもわからない。期待して話しているうち噂になりそれが広がる。ヘルシヤムではなかった話だ。成長の過程にあり卒業後提供がやってくる。

コテージにいる二年のうちに、介護人が提供者を決めなければならない。介護は提供者の介護をする。仲の良い二人は、猶予されるとか猶予を申請するとか猶予を切望する。強い願いは噂になって広がる。愛し合う二人は一時でも長く二人でいたい。噂に実体はない。確かめようはない。

ノーフォークでわたしとトミーは三人と別行動を取る。イギリスのロストコーナーでなくしたテープを探す。ジャケットの裏、デザイン、曲名何もかも全部あれと同じものだ。心の拠り所のテープを紛失した。探したが見つけられなかった。ようやくここで探し出した。わたしは喜ぶ。コテージに戻り介護人の道を歩もうと決心した。

(2) ルース

ロドニー、クリシーから自分のポシブルを見たと言われ浮足立つ。二人の話はガラス張りのオフィスで働く女性だ。ルースは将来の夢を見る。雑誌のオーブンプランのオフィスをはたらきがいのある職場と思い、理想の職場について語る。完全に乗り気だ。

オフィスを見て不安そうに目が動く。その人がポシブルではないと決定すると最初からばかばかしいと思っていたと言う。「親」はああいう普通の人ではない。ポシブルはどぶやごみ箱を探す。そこにいると言う。

ルースはポシブルの夢を見た。期待して小旅行をした。が、その人はポシブルではない。その親から生まれていない。一つの細腕から生まれたクローンだ。形態は人でも人間ではない。

(3) トミー

ルースと安定カップルだ。キャシーがボイラー小屋でポルノ雑誌を見かけ、ただのエロ本だ、俺は全部見ていると言う。刺激が欲しかったのではない、怖がっている様子だったと心配する。

ルースのポシブル探しをポシブルかどうか関係ない、探偵ごっこ切り捨てる。「親」が見つかって何が変わると否定的だ。

三人と別れてキャサリンに付き合う。「親」がどんなでもおれたちに関係はないと言う。

レコードやテープを山積みしている店で、テープを探す。見つかる喜びカセットケースをひたくり買ってやる。

作品が親を見せるということがわかる。展示館に作品がなければチャンスもない。チャンスはどぶに捨てた。万一の事を思ってやっていることがある。黒い手帳に十頭以上の動物の絵を描いていることだ。

わからないことも解決する。誰でも思いつく方法はマダムを捜すことだと言う。これはトミーしか思いつかない。トミーは冷静で思慮深く成長している。実情を見抜いている。

第三部

(1) キャシー (わたし)

介護人は向いていた。向いていない人には辛い仕事だ。苦痛と不安ばかり間近に見る生活だ。提供者が使命を終わる日が来る二日前でも起こる。

一人で何時間も田舎道を走る。ビジネスホテルに泊まる。センターからセンターへ、病院から病院へ移動する。話し相手も笑い合う相手もない。

投げやりになった人が数多くいる。やめられる日を提供者になる日を待っている。

車に乗って数時間、空と道路を相手に白昼夢に浸る。余裕があればウィンドーショッピングを楽しむ。サービスステーション駐車場でコテージ以来七年ぶりにローラに合う。彼女とは親しかった。彼女は話し相手になってくれれば誰でもいいという感じだった。数年前診療所でルースに会った。当時は介護人だった。キャシーがいなくなってからひどくなった。彼女の最初の提供はひどかった。介護人ともうまくいっていない。何人も交替している。ルー

スの介護人になったらどうかと勧める。

ヘルシヤムがなくなった。一年前に噂を耳にした。ロジャーが土地、建物もホテルチェーンに売却される。生徒たちは国中の施設に移されると言った。

一緒に育ち全国に散らばっている介護人と提供者はヘルシヤムで育ったことで結ばれている。あそこの日常がなくなる。すぐに行動を起こさないと機会は永遠に失われる

ルースの介護人になってやれというローラの言葉が大きく心に響きつづけた。介護人になることを決めていたが一言で決断した。

正式にルースの介護人になり、毎週三、四回午後遅く行く。ミネラルウォーターとビスケット一箱持って行く。会話は途切れた。

ある日の午後、シャワー室からタオル一枚で入ってきた。彼女は何かされる時が来たと覚悟した。どちらにも衝撃だった。お互いに信用されていない。

訪問は苦痛で介護失敗の報告を書きルースの介護人をやめる決心をした。

そのうち船が一隻湿地で座礁していると二人の提供者から聞いた。ルースも聞いた。話す材料ができ関係が回復した。トミーの話題も出る。トミーも誘い車で行く。車を止めて歩く。トミーはルースの体力の衰えぶりに初めて気づく。わたしは道順を書いた紙を見て先頭に立つ。湿地の中に船を見る。トミーはヘルシヤムもこんなかと言うとルースは閉鎖になったからって沼地になるわけではないと反対する。

ヘルシヤムは閉鎖になった。目の前に座礁した船がある。提供者は次々に使命を終えて行く。ルーシーはクリシーが二回目の提供で使命を終えた、提供のたびあちこち移動させられると言う。提供のたび使命を終えることになるのは確かだ。だからその都度移動させ死亡できるだけ別の施設に移す。

トミーは二回目の提供で使命を終えるなんて無念だったろうと同情する。ロドニーが平気だったなんて信じられないとルースが言う。わたしがロドニーのような立場の人ならたくさん見てきてると言うるとルースは介護人に何がわかると繰り返す。わたしは介護人だから多くをみていると答える。

トミーは一回目の通知が来たと言う。介護人は落第だった。ルースは五年間介護人をやって通知が来てもいいと言う。

ルースはああいうオフィスで働くことに挑戦してもよかったと思う。働きたい仕事があれば試してみることだ。

三人の関係はいつも壊れやすく微妙だ。ルースとの間に会った警戒や不信の念が消えた。

ビスケットとミネラルウォーターを持って行ってベランダに座り話した。ルースはトミーの介護人になることを考えてみたか尋ねる。今回は乗り切れそうにない。遠く自分の体内に閉じ籠っていた。わたしを認めた。最後の戦いを戦っている。わたしはできるだけ早くなろうと思う。

一年後、トミーの三度目の提供は回復していた。朗読する、彼は手帳に丁寧に絵を描く。健康を取り戻す。四度目の提供の通知の可能性がある。

わたしはマダムを見た。ルースがトミーに渡したマダムの住所を書いた紙きれ通りだった。来週トミーが健康診断を受けに行くから一日の外出許可を取り、帰りにリトルハンプトンに行く。トミーは猶予の事展示館のことをずっと考えつづけてきた。それが目の前にある。

車で出かける。マダムはコレクションは大変な仕事だった、作品は作者の内部をさらけ出すと言う。彼女はエミリ先生に代わる。

作品を持って行ったのは、あなた方の魂がそこに見えると思ったからだ。出来のいい作品を集めて展示会を開いた。こういう絵が描ける子供達を人間以下といえるかと言った。

提供の猶予の噂は昔からあった。大部分の生徒は噂の真偽を確かめるところまでいかない。夢を見る材料、空想だ。時には真実のかけらもない。提供を猶予して貰う夢はわたしたちの力の及ばないことだ。

当時の臓器提供計画の在り方に反省を促した。生徒たちは普通の人間と同じように感受性豊かで理想的な人間に育つことを示した。

クローン人間は全て医学のための存在だった。戦後の初歩的団段階では試験管の中の得体のしれない存在があなたたちだ。

不治とされていた病にも治療の希望が出て来た。臓器はどこから用意されるのか？生徒の臓器提供を必要とした。臓器提供用の生徒を作ることは仕方がないことだ。

マダムは無慈悲で残酷な世界にもキャシーがいた。心の中では消えつつある世界と分かっているのに離さないでと懇願している。あなたの姿に胸が張り裂けそうと言う。

帰るとトミーは提供者仲間の方に向き始めていることに気づく。トミーは除け者扱いした。キャシーは介護人で、提供者の気持ちが分からない、彼は最後を知り遠ざける。

トミーの部屋以外行くところはないが、介護人を変える手続きをした。相手への思いやりを意識していた。非現実の空間にいた。

キャシーは介護人になり、実績を上げる。ローラはルースの介護をルースはトミーの介護をする。キャシーはルースとトミーの介護をする。親しかった二人を介護し、失う。育ったヘルシャムを失う。介護の仕事も失う。

クローンキャシーはクローンとして一生をクローン通りに生き、周りのものを失い、自分自身も失う。クローンは消滅する、限定された存在として限定された生を真正直に精一杯生きる。

(2) ルース

介護人を五年やり、提供の通知がいつきてもいいと思う。最後の提供から二ヶ月たった。手術はひどかった。介護をキャシーにして貰う。

クリシーが二回目の提供で使命を終ったことを知り不安になる。

トミーとキャシーの仲を裂いたと謝罪する。邪魔したが二人に取り戻してほしいと頼む。遅すぎないトミーは二回提供しているがだめにはならないと反論する。

船見物に行ったのはこのことを言いたかったからだ。もう一つトミーにマダムの住所を書いた紙きれを渡すことだ。この紙きれで二人はマダムに会い核心に触れることができる。

二人が結ばれることを願い、二人が目的を達成することができる紙切れを渡す。二人の仲介人になる。

(3) トミー

五、六キロ太っている。薬品のようなにおいがする。キャシー、トミー、ルースとブランクなどなかったかのように振舞っていた。

二人のやり取りでは、キャシーとうまが合う。キャシーがポルノ雑誌を見ていたことを大したことはないと言い、ルーシーがふらつくと支えてやる。目を配り優しく接する。

使命が近づくとキャシーの介護を断る。親しい人に不様な様子を見せたくないからだ。

絵の重要性に気づくと丁寧に描く。書いた手帳を大切に持ち歩く。

マダムに会い、気にかけていたことを明らかにする。ずっと考えていたことと一致する。その時トミーはわかっていて、周りの者が分からずにいたのだ。誰も知らなかったことをたった一人知っていた。知っていても何もできないので癩癩を起こした。

トミーはキャシー、ルースに思いやりを示し助言した。考えを明確に述べ適切に判断した。シャームヘルの本質を、そこにいて把握していた。絵画で評価する施設で描けないトミーは全てを知っていた。

クローンは今ある存在だけが存在だ。成長して仕事に就こうとしても一般的な仕事はない。提供者になるか、提供者を介護するかだけだ。提供して一度で使命を終ることもあり。四度しても終わらないこともある。提供を不安のうちに待ち続けること通知が来て提供することが仕事だ。介護人としてかけまわっても特定の施設を転々とするだけだが。

限定された施設で成長する。成長後、ただ二つの生き方しかない。一生は限定された生涯だ。

親を探すこともできない。一つの細胞から誕生したものに親はいない。自己の根源は探せない、根源はない。

クローンは短命と言われているが、では移植した臓器の寿命も短命なのか？